

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第90回

東アジアの陶藝はどこにゆくのか

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

鶯歌陶器博物館

台北から西へ鉄道で30分ほどゆられると、陶藝の町、鶯歌に着く。当地の発音では「インコー」に近い。だから日本では小型の鸚鵡をインコと呼ぶわけではあるまいが、まさか。などとあらぬ連想を逞しくした。町の北側の丘陵には、町の名前の由来となったと伝えられる鶯歌石という名の岩山がある。それが見方によっては鸚鵡だかインコだかの頭部によく似ているのだから。日本で言う鶯(うぐいす)ではない…のだが、そのあたりの事情は、一介の旅人には分からない。オランダ勢を征伐した鄭成功がこの地を訪れると、地元の凱達格蘭族は、巨大な鳥の発する瘴気の危害に苦しんでいた。鄭成功が弓矢を取ってその怪鳥の喉を射抜くと、手負いの鳥は山頂へと逃れようとしたが力尽き、そこで石に化したのだという。『国姓爺合戦』にそんな逸話が盛られていたのだろうか、とあやふやな記憶を探るのだが、困ったことに、これまた判然としない。

この鶯歌に、2000年には台湾ではじめての陶磁器を専門とする鶯歌陶器博物館が開館した。巨大な吹き抜けのあるガラス張りの建物に入ると、1階から2階にかけての常設展示区画では、陶藝の基本的技術の実物説明から、台湾における陶磁器産業の沿革、さらには台湾「原住民」(当地ではこの表記を用いている)の陶器の民俗学的展示、最後に現代のセラミック産業の展開まで学習できるように工夫されている。幼児や一般向けの陶藝教室もあり、庭園も完備する。展示の一角には窯を再現してその中を体験できる区画もある。

折から上階では「2012台湾国際陶藝双年展」(6月30日-11月4日)が開催されていた。54カ国から総計651点にのぼる作品が提案され、そのうち111点が展示のために選出された、という。台湾のみならず、香港、大陸、韓国さらには日本そして欧米に至る現代の陶藝の動向を捉え、国際的な動向を観察する定点観測としても、まことに適切な企画だろう。

台湾国際陶藝双年展・全民評審団評価

最初に受賞作を一巡して眺めておこう。詳しくは分からないのだが、審査委員による表決と、一般投票による順位とが並列しているようだ。「全民評審団」による一般投票では、台湾の施宣宇(台湾)の《旋回木馬-朱墨》が1900票を超える投票を得て、金賞獲得。《驚奇の水花》で銀賞を得た曾章成(香港)の1300票とは600票の差がついたという。追って銅賞は林善述(台湾)の《走近異境》とAndrew Livingston(英国)の《後現代動物》、原題はPost Modern Animalsだろうが、この両者が僅差で続く結果だった、という。

最初にこの順位を並べたのは他でもない。そもそも現代セラミック作品に評点を与えるうえで、いかなる基準が立てられているのか。否、そもそも立てうるのか、という疑問があるからだ。おおまかにいって、基準となりうる項目には、意匠の創意、焼成の技術、釉薬の彩色・発色技法、形態表現、材質の活用などが挙げられよう。だがそれをどのように総合的に組み合わせれば、釣り合いの取れた評価になるのだろうか。さ

らに評価する側の文化的な背景や、上述のどの項目に重きを置き、何を軽視するかによっても、判断は左右されるだろう。国際展となった場合、判断の基準は、はたしてどこに設定されるのか。

施宜宇の《旋回木馬-朱墨》は、回転木馬を象った作品だが、本稿の筆者には、どうしてこの作品にこれだけの票が集中したのか、説明がつかない。何のために、木馬の形態を陶磁で模倣しなければならないのか、その必然性が納得できないからだ。銅鉄の螺旋状の金属柱を模したメリーゴーラウンドの軸螺子の造作や、銅材を思わせる木馬の翼の型取りの技術、そこに細かな文様を丁寧に彫りこんだ手技が評価されたのだろうか。そうだとすれば、きわめて技法重視の評点ということになろう。なんらかの文化的な背景を掬いとらなければ、投票数の根拠も見えてこないのだが、正直、それがよく分からない。

《驚奇の水花》で銀賞の曾章成は、もともと香港で警察官だったという変り種だが、物体が水面にぼちゃんとばかりに飛び込んだ瞬間にできるはねっかえり splash, すなわち「水花」を陶磁で見事に造形化する。経歴をみても、もっぱらこの軟質陶器の特殊技法を売りにする作家である。そのため、色彩は排除して、白色の珪土による作品に専心している。専売特許を意匠に生かすこ



施宜宇 Samuel Hsuan-Yu Shih 《旋回木馬-朱墨》★

とにも秀でた才能を発揮しており、例えば A Splash of smileは、茶碗からこぼれた牛乳のトバッチリに、人間の笑顔が浮かび上がる。Life Time Partnerでは、ティーカップとソーサーとが人面に変貌し、双方が重力に遵って接吻を交わしている。

今回の受賞作、《驚奇の水花》は現地に「駐村」しての制作だが、ひとりの子供が

腕に向かって、縁の外から思い切り息を吹きかける。すると腕が液状化して吐息とともに飛沫となり、腕の内側を飛び越えて反対側の縁に穴を穿ち、それを突き破って、さらにそのトバッチリが隣の腕の側面にまで爆風を及ぼす、という意匠。遊び心は分かるし、水滴の飛沫が飛び跳ねる様子を空中で固定する技量にも確かなものがある。だが、やや技巧に任せて奇異を街った造形が過剰で、曲芸を見せつけられる、とても形容すべきだ



曾章成 Zhang-Cheng Tsang 《驚奇的水花》 Splash of Wonder ★



林善述 Shan-Shu Lin 《走近異境》
Closer to a Foreign Land ★



Andrew Livingstone 《後現代動物》
Post Modern Animal ★

ろうか。かえって軽薄な印象を与えかねないのが、いささか惜しい。読者の皆様のご感想は、いかがだろうか？

一般投票の銅賞を得た林善述の《走近異境》は、頭でっかちの土人形。数体が同一色彩の褐色の砂場のうえに佇んでいる。頭の重さゆえに転倒し、手足を空中にばたつかせてもがくものもあり、それを傍らに、ボールにして転がされているものもある。八木一夫に、同じような趣向の戯作があったのではなかったかしら？ 同じく銅賞を得たAndrew Livingstoneの《後現代動物》は、技法としては着色した軟質陶器だが、さまざまな種類の純血品種の犬たちが、色とりどりの人間の衣装をまとった、きわめて写実的な作品で、技術も意匠も穏当な小品。いかにも英国らしい主題といえようか。ことさら珍奇というほどのこともなく、むしろすぐさま商品化できそうな完成度からは、投票者たちの小市民的趣味が見て取れる。

物象・象意・紀象・変象

専門の見地からの評定では、以下の四つの基準によって、それぞれ賞が与えられている。すなわち、

「物象」Physical manifestation

「象意」Mental manifestation

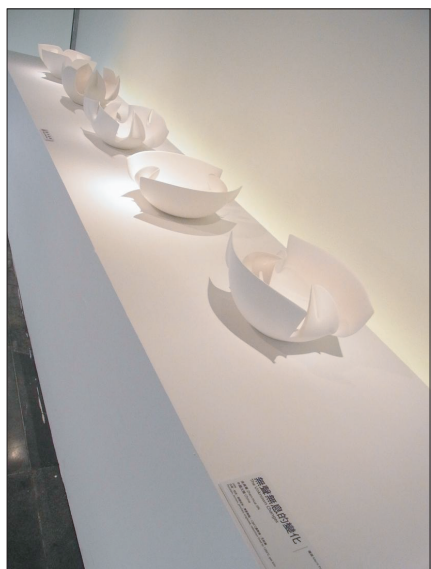
「紀象」Environmental manifestation

「変象」Existential manifestation

日本語の語感での漢字の理解と、当てられた英語とはかなりの懸隔が感じられるが、これら四つの「象」は、この展覧会のための造語なのだろうか？ ちなみに、上でふれた一般投票銀賞の《驚奇の水花》は「変象」部門で「首賞」に推されており、《後現代動物》は「紀象」部門で「評審者推奨」となっている。これにたいして、一般審査で金賞の《巡回木馬-朱墨》およびもうひとつの銅賞に該当する《走近異境》は、審査員側からの受賞対象からは外れている。一般の愛好者の好みと専門家の目による評価の落差を、おそらくは、こうした差異に見定めることができそうだ。

「物象」Physical manifestationとは材質の特性を引き出した表現性（追求物件外観之美）、「象意」Mental manifestationとは作者の情動あるいは理知的な表現意図に基づく造形（搾掘内在意念情感）、「紀象」Environmental manifestation（叙述記録当代社会環境）とは制作者ならではの世界観察の成果、そして「変象」Existential manifestation（探討時空の変動与不穩定性）とは、時間と空間における変貌を探索する意識、と見てよからうか。

この最後の「変象」にこのコンペの特色が集約されているように見受ける。そして曾章成の作品は、いわばこのコンセプトに合致した提案として高く評価された、あるいはこの評価基準の存在を前提とした提案



金貞華 Zhen-Hua Jin 《無声無息的变化》
The Unknown Changes



小島修 Osamu Kojima 《郷愁・台湾-01》
Nostalgia



Ronit Baranga 《群》 Crowd

だったことが推測できる。この枠のなかでは、梁家豪（台湾）の《過渡空間系列》が評審推奨賞に、また金貞華（大陸）の《無声無息的变化》が優選となっている。題名からも推測できるように、どちらもある一定の変形規則（前者は朴訥で愉快的形態の順列組み合わせ、後者は平面を湾曲させる位相幾何学的変換）にそって形態を展開し複合する操作。それを時系列にそって直線状に並べることで、形態上の説得力を得ようとした試みである。

この基準を立てると、自動的に排斥とまでは言わぬにしても、相対的に不利になるタイプの造形もあるだろう。ひとつは集積、密集あるいは複数のオブジェを巧みに配列することで空間的緊張感を構成しようとする類の作品である。だがこれらは、ほかの三つの部門に吸収あるいは配分されることで、結果的には挽回を果たしているように見受けられる。「物象」部門で銀賞を得た李宗儒（台湾）の《稻草泥枝》は、その名のとおり、水田に生育する稲を土壌もろとも切り取った断面図という質感を訴えている。また「象意」で金賞の小島修の《郷愁・台湾-01》は、かつて窯を築いていた煉瓦の断片を思い起こさせる石積み風の廃墟のような造形であり、これも題名にあるとおり、作者の幼少よりの体験を織り込んだ作品である。

「象意」部門はまた、作者の情念を含み、表現意志を汲む作品を要請する。評審推奨賞を得たRonit Baranga（イスラエル）の《群》Crowd は、不定形の肌色をした碗の底に人間の口が歯を剥いているという代物で、それが26個ほど集積している。目鼻のない凹形の仮面（マスク）が凝集している雰囲気があり、演出によっては不気味な悪意の喰いが作品から木霊してくる予感がある。推薦者は審査委員として日本から参加した中村錦平。そうと判ると受賞も納得できようか。「紀象」では、銅賞の朴正根（韓国）《書本》は、陶性の本の集積。陶の本となれば、八木一夫のみならず荒木高子の《聖書》シリーズなど、いくらか先例はあろうが、ここでの新機軸は、本が山積み

されて、頂上にゆくほど膨れ上がるという不安定な構成だろうか。

総じて陳列台のうえに巧みに配置されて、完結した小宇宙を営むような展示は、いわゆる商品陳列の連想を与える懸念からだろうか、大きな賞の対象からは除外されている。だがこれらの展示については、会場の照明技術の高さを裏書する効果があがっていた。色彩に頼らない素焼きの造形が、適切なライティングによって美しい影を落とし、磁器の肌触りを艶かくし浮き立たせる。器であることの必然性を取えて問い直すまでもなく、存在への信頼といった様相を訴えるこれらの佳作に、土と轆轤による造形の原点が問い直される。

そのかたわらで、他の分野からの借用や、二次的利用の痕跡が露呈している作品も、いくつか入賞しているのが、やや気になった。「優選」となった李恵珍(韓国)の《書画与情緒的回想録》は、題名にも示唆されているが、フランシス・ピカビアの絵画作品、人間の顔の表皮が螺旋状に切り取られ、ちょうど林檎の皮をくるくると剥くような具合に解けかかっている状態を描いた作品を、陶磁で立体的に実現してしまったもの。見事な技巧だが、絵画の立体への展開という限界を初期条件に背負っている。またこれも「象意」での入賞だが、評審推薦賞を受けたCynthia Siegal(米国)のLilith人物塑像は、ルネ・マグリットが描いた青空と雲の肌をした大理石の女性裸体を陶磁で立体にした趣向。審査団はそれを承知で推薦しているのだろうが、他分野での先例をいささか安易に流用した形跡が拭えない。

こうしてみると、素材の可能性と造形的可塑性に満ちた陶磁あるいはセラミックの世界は、現実には相容れぬ原則が競合して乗り入れる混戦地帯であり、審査側もそのなかで、ありうべき判断基準を絞り込めない膠着と背中合わせに、評価を模索している風情が見えてくる。陶磁という素材を、他分野の藝術表現の投射画面に借用するだけでは、陶磁を副次的、二次的な代用品の領分に貶めることになるだろう。さらにまた西



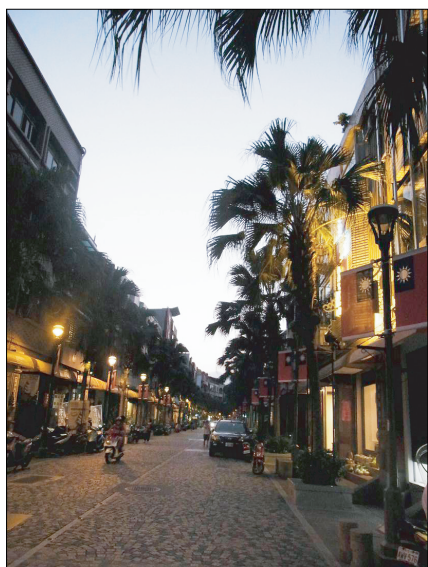
曹信鉉 Shin-Hyun Cho (Korean) 《線性流動》
Linear Flow



李 子 Gi-Za Lee 《白色花朵》
White Flower Harmony



趙光勲 Kwang-Hun Choe 《行星》 The Planet



夕刻の鶯歌老街。2012年10月8日（稲賀撮影）

洋の古典彫刻を土の焼き物で置き換えるのでは、いかにも高級藝術への隷属に甘んじる結果と映る。むしろ、立体造形のなかの下位分野としての、青銅、鉄、石材そのほかの素材と並んで陶磁を捉えた場合、そうした並列に陶磁がいかに反発し、抵抗するのか見定め、そこに表現の契機を見出すだけの見極めが、いま一度必要とされているのではなからうか。「陶藝」という恵まれた文化的環境による庇護、あるいは制約が日本には厳として存在するが、それを脱した野生地帯で、陶磁（＝セラミック・アート）に活路を拓かせる道を探ることにもなろう。

と同時に、台湾での陶藝国際展を参観して、あらためて抱いた感慨がある。すなわち、いまや大陸中国や台湾地域での催しを無視しては、アジアの胎動が見えてこない、という現実である。美術館系の出版に限ってみても、中国語出版物の世界を無視しては、取り残される。日本列島に固有の陶藝観に自足することはもはや不可

能、という現実である。

東亜陶藝術の将来

こと陶磁器やセラミックの動向報告に関しては、日本で単独編集が無理ならば、東アジアでの共同編集の方向を模索すべきであろう。もはや旧来の美的領土意識では、現実への対応は間に合わない。日本に閉じた虚構の世界をつくるからこそ、排斥運動の標的になる。おりからの領土問題など、国慶節を迎えた台湾ではどこ吹く風という扱いだった。だが万一排斥が発生し、一時的にせよ交流が妨げられて困るのは、むしろ双方の国に向向している現地職員であり、現地労働者だろう。優秀な中国人留学生を取り入れた多国籍企業化への意識改革の努力が、日本ではなお、あまりに遅れている。藝術の領分にあっても、日本列島内部では充分見えてこない光景が、台湾の展覧会で見えてくることは、疑いない。知的な協力体制が、あらたな文化創造のためにも、求められている。その手応えを実感した。

博物館を後に、鉄道の線路下のガードをくぐって、山側に登り、夕闇迫る鶯歌の陶磁老街を散策した。70軒におよぶ陶磁店が連なっていて壮観だが、類別すれば、中国茶器、水盤や屋外花器といった家庭用の陶磁器具、日本向けの茶道具、それに日用品といった四種ほどに、店舗の傾向が大別できる。近年では中国本土での喫茶流行にともない、大陸から買い付けに来る観光客が急増しているようだ。窯変が中国では不吉として忌避されたことは有名だが、中国と日本の陶磁趣味は、見事なまでに背反する。だがその対立と拮抗のあいだに立ち、日本の陶藝から養分を得つつも距離を保てればこそ、台湾の鶯歌には、窯業の未来に向けた、あらたな可能性が、なお予測不可能な姿で潜んでいるように見受けられた。

* 展覧会タイトルの英文は、"Ceramic Visions, Taiwan Ceramics Biennale"

* 同行してご案内下さった、高雄出身の秀才、台湾大学修士の李文聰君に謝意を表する。（23 Oct. 2012）

* キャプション末尾に★印のある図版は本展図録より。ほかは筆者撮影。